



大原 敦子さん
おおはら ありこ

仙台筆筒、工芸家具の製造・卸業・販売を手がける椋(け)やき(産業)大原(大原)光(社長)の創業子、明石(あかし)・とく(お)氏の長女(4人姉妹)として、昭和34年(1959年)7月8日、仙台市宮城野区五輪で生まれる。
●東二番丁小学校から聖ウルスラ学院中学校・高等学校を経て、東北学院大学法学部法律学科を卒業。
●平成11年(1999年)に椋産業入社。平成18年(2006年)から取締役副社長に就任。

「仙台筆筒を扱うお客さま(需要)がないと職人のなり手も育たず、伝統家具は成り立たない」と、これまでで豊の上で見ていた仙台筆筒をインテリアや仏壇(仙台仏壇)などに展開、使い方の提案に力を入れている。長男の大原(長)祐(31歳)氏が取締役仙台東口ショールーム店長。
●趣味は月3回の茶道(裏千家)。仙台商工会議所女性会常任委員。



菅原 社長であるご主人の大原(大原)光(さま)との結婚はいつだったのですか。
大原 二人とも、東北学院大学法学部の同級生で同じクラスだったのです。それが縁でお付き合いし、卒業前に結婚しました。
菅原 お早いですね。
大原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの

大原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの
菅原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの



仙台筆筒を住宅空間で体感できる東口モデルルーム。5店舗目の直営店、仙台東口ショールーム



大原 住み替え層などのお客さまに、仙台筆筒による空間づくりを提案しています。
菅原 最後は女性のためにメッセージをお願いします。
大原 家庭と仕事を両立するためには、可能なら周囲の方々の力を借りて仕事ができる環境を作っていくことが大事だと思っています。私も主人の母にとても助けられて、今があると思っています。
菅原 今後とも活躍を期待しております。

清月記 SPECIAL対談 大原敦子さんが語る「女性の生き方」

仙台筆筒の製造・卸・販売を行い、今年で創業40年となる椋産業(株)副社長の大原敦子さん。職人不足などの課題に取り組みながら空間作りを提案、ファンを増やしながら、仙台的工芸家具に新しい魂を入れ続けている。

「周囲の方々の力を借りることも大事です」

菅原 高級品の仙台筆筒は、昔から所有することがその家のステータスとなり、また持つことが目標となる時代
大原 はい、今年85歳になる私の父篤雄が創業しました。父は徳島県出身でしたが、転勤先の仙台市御町で住宅設備会社を興しながら、工芸家具などの蒐集を趣味としておりました。東北地域の工芸家具が風前の灯火にあることを知って、「これを何とか守っていけないか」と、昭和53年3月に、仙台筆筒や工芸家具の製造と卸会社を設立しました。おかげさまで今年で40周年を迎えます。



後左から父・篤雄、祖母・たけよ、母・恵美子 前左から敦子、妹・まみ



インテリアコーディネーター時代、アメリカのマービンウィンドーズ社で

大原 ケヤキの美しい柰目、それを生かす艶やかな漆塗り、そして豪華な飾り金具です。漆は「木地呂塗り」という何度も漆を塗り重ね、鏡面のような光沢を出す塗り方です。金具は職人が鉄板を叩いて独特の文様を生み出しました。江戸時代の日本刀の鑢(つば)の技術が活かされてきました。現代では職人不足のため製造技術で製作した金具も使用していますが、それと手作業で作られていると思

大原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの
菅原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの

大原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの
菅原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの

大原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの
菅原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの

大原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの
菅原 父が彼を大変気に入って、父がゲットしたようなもの



菅原 裕典 すがわら・ひろのり
1960年宮城県塩釜市生まれ。1983年東北学院大学経済学部経済学科卒業。83年名古屋・中京葬儀社入社。85年3月、父・清一とともにすがわら葬儀社設立。1991年、株式会社すがわら葬儀社の組織変更。2000年工ボックせがわら葬儀社代表取締役。2001年せんだい東工工場放逐取締役。2001年4月より社会福祉法人 無量壽会理事長就任。2011年5月認定NPO法人J.E.T.O.みやぎ理事長就任。2015年1月仙台市青葉区木町通「仙台迎賓館「高苑」」運営2015年7月。国際ロータリー第2520地区ガバナー就任。

大原 江戸時代、伊達藩が、地域産業として製造を推奨しても言われています。岩手県の岩谷堂筆筒も当時伊達藩領だったので、同じように製



清月記総本社